
PERTNER - 更生編 -

Cocco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P E R T N E R - 更生編 -

【Nコード】

N 4 8 7 0 B A

【作者名】

C o c c o

【あらすじ】

仕返しと言う名の悪戯をこよなく愛する悪魔が人間界へと追放された！？ 与えられた点数をゼロにしなければ、魔界に帰えることは許されない！ さまざまな”イイ事”を手取り足取りパートナーと協力して、さあ今日も一緒に点数を減らしていきましょう！ 訳あり悪魔と訳あり人間の、ちょっぴり切ないラブコメファンタジー小説。友情と愛情。貴方は自分の世界へ帰るために、それらを捨てることができますか？

第一話　：　こんにちは、悪魔です。

人と違つと気が付いた者は、自ずと自然に孤独を選ぶようになるのだらう。

類は類を呼び、環という環を広げて人生を謳歌する。それが生き物の常と言ふのならば、類を呼びたくても類が見つからない者は、環を広げたくても環を掴む手がない者は、一体どうしたらいいのだらう。

——紅、^{べに}愛しています。

その答えを教えてくれたのは、お前だった。

PARTNER　・　更生編
パートナー

『歳は永遠の十八歳。干支はうさぎ年。名前は緑と書いてりよくと読みます。はい、悪魔です。あ、苗字はありません。人間さんと違つて悪魔は名前だけです。ええつと、好きな食べ物はチーズ。マイブームは仕返しと言ふ名の悪戯をすること。そして、その悪戯魂をこよなく愛することです。』

……まあ、思い当たる節は多々ありますが、ふふつ、恐らくわた

しの愛が重かったのでしょうか。不本意ながらも本日付けで魔界から追放されてしまいました。

——要するに、わたしが言いたい概要をまとめますと、わたしのパートナーに選ばれてしまった可哀そうな人間さん、もとい、高橋^{たかはし}紅^{べに}さんのお宅はこちらで合っていますか？　と云うことです』

思わず息を呑んでしまうほどの秀麗な顔立ちが、インターフォンの画面の中でよそ行きの笑顔を晒していた。

（……なんだこの白過ぎるの）

初めて生で見た。

と言うか、実際に居るとは思いもよらなかった。

雪を滾々^{ごんごん}と降らし続ける昼間の冬空と同じ色を、その双眸に閉じ込めている生き物が居るなんて。神々しきたる銀の色を、その髪一本一本に与えられている生き物が居るなんて。

銀髪銀眼。その上、美少女。よそ行きの笑顔でも効果は破壊的。ここで止まれば毎日が両手に花ならぬ、両手に男だろうに、やはり王道とイカないと言うのが平凡人の気持ちをよく理解している。とりあえず、天は二物を与えないのが事実だってことは分かった。

第一印象を良くするためにだろうか、それとも自分の存在は無害だと主張しているのだろうか。

だが残念。いくらこちらの警戒心をほぐそうとばかりにその双眸を嗤わせていようが、はたまた自分の無害と好印象を手の指そろえて押し売ろうが、一足も二足も遅かった。何故なら、その自己紹介を前にして全てが無に還っているからだ。白いのはそれに気が付く素振りも見せずに、ただ愛嬌と無駄な努力を振り撒き続けている。

部屋着である上下黒のスウェット姿で、俺は白目を剥きながら人差し指をインターフォンの電源に添えたまま直立不動と化していた。時刻は午前四時五十分。何度も鳴る呼鈴チャイムに起こされ、半分キレながら常識外れの訪問に出てやると、そこに居たのはよそ行きの笑顔で冒頭を語る白いのだった。

「……」

『返事がない。ただの屍のようだ』

目を奪われ、息を呑み、呆ける。少なくとも冒頭の自己紹介を除きさえすれば、きれいにその一連の動作をやってみせることができたはず。

予期せぬ出来事が起こることこそが人生だ、と言い切ってしまったばそこまでだが、静かにインターフォンの電源を切ることだけが、白いのへの精一杯の相槌だったことも、また予期せぬ人生の一環だったに違いない。

だが、相手は手強かった。

人の精一杯の相槌をものの数秒で咀嚼して消化し終わると、また部屋の中を電子音の嵐にへと変えやがったのだ。

こいつ絶対にガキの頃ピンポンダッシュで遊んだことがあるなど、どうでもいい確信を胸に抱きながら、俺はもう一度だけと心に決めてインターフォンの電源にへと指を伸ばす。今の俺の心情を物語るように、伸ばした指先が小刻みに震えていた。

そして、躊躇うことなくこう言い放つ。

「人違いです」と。

そう言い終わるがいなや、俺はインターフォンの電源を素早く切り、まだ温い布団の中にへと頭まで潜り込んだ。

この手の回避法は、居留守を貫き通すか人違いですと言い張ってみせるかの、どちらかに限ると思う。大体、俺が住んでいるのは、セキュリティーを謳い文句としたマンションだ。目当ての部屋に行き着くためには、三重のセキュリティーロックを解除しなければならぬ。一つ目はエントランスで。二つ目はエレベーターで。そして三つ目は玄関前で。どの道、俺の許可がなければエントランスの自動ドアは開かないし、万が一どさくさに紛れて誰かの後について行くとする、今まで一回はやったことがある人が多そうなることをしたとしても、このマンションのエレベーターは入室を許可した家主の階にしか運ばないシステムなのだ。だからこそ、人様の玄関前まで辿り着くなんて有り得ない。偶然が偶然を呼ばない限り。

そう、普通なら有り得ないことなのだ。

家主の許可なしで、家主の玄関前に居ることなど――

「……」

例え獅子奮迅の如く、また始まった音の海に溺れそうになったとしてもだ。例え、例え白いのがエントランス前のインターフォンではなく、玄関前のインターフォンに立っていたとしてもだ。ここで自分が高橋紅だと認めてしまったら、何か取り返しのつかない事態に陥るような気がしてならない。こいつは一体全体どうやって玄関前まで辿り着きやがったのだと、頭を抱えた時点で負けになることもまた然りだ。だが残念なことにも、人違いだと決めた意志がすでに挫けそうになっている。

「不審者のレベル、たけえ……」

不屈の精神で呼鈴を押し続ける白いの。
ひたすら忍耐の二文字に縋りつく俺。

だがこの勝負の行方は、俺の堪忍袋の緒が切れたことにより終焉を迎えることとなった――

”

『高橋紅、十八歳。東京都十園町とおえんまちの七階建てマンションの最上階、七〇七号室に入居中。誕生日は八月八日、干支はとら年。日本人特有の典型的な黒髪に、人間界では非常に珍しい赤の双眸の持ち主である……』って、魔王様とオソロとかナウいんですけど。それから、小中高大一貫教育を受けており、現在は高校最終学年に在籍中。へえ、わたしと一緒にんですね！ 身長は……わあ、高い。百八十八センチ！ わたしの身長が百五十五センチですから、隣に並んだら凹凸半端ないですね！ ちなみに体重は書いてありませんでしたが、わたしのパートナーは高橋紅という人間だと、この追放書にちゃんと書いてありますよ。ほら、地図だって確かにここのマンションのことです。それにですね、追放される前日に、人間界攻略講習会と称したお勉強会に強制参加させられちゃったもので、その時に無理強いにも見させられた宣伝映像は印象強でしたから、間違っているはずがないとわたしは確信しているんですよ。なんなら、ここのマンションの宣伝映像曲シエムソング、歌ってあげましょうか？』

「……………新手の勧誘？」

『滅相もない！ わたしは真剣にお話をしているのであって、わたし自身は勿論、企業団体などを含めてフィクションなんかではありません！』

「……………」

くわつと顔に影を作らせて力説してくる白いのに、俺の精神力は大幅に摩耗されていた。命の光がウルトラマン並みに点滅しているライフゲージぐらいには、一方的な攻撃を受けていると思う。だが素直にその支

離破滅な話を聞いているのは癪だったので、最後の力を振り絞るように軽くボディーブローを入れてみたが、難なく倍返しにされたことにぐうの音も出なくなる。

早朝四時、インターフォンという防衛線上で不毛な会話を交わす、俺。その名も高橋紅。

現在、このマンションで一人暮らしを悠々自適に堪能している、今年で十八歳になったばかりの男子高校生である。

一人暮らしにしては広さに余裕がある三LDKの間取りに、バルコニー付き、ペット対応、厳重な防犯システムを完備している。そして売り文句はと言うと、「都心と自然と共に生きる」を概念としているそうだ。その名の通り、右に行けば昔ながらの風情が残る商店街、左に行けば利便性を追求した交通ネットワーク、真っ直ぐ進めば政令指定都市の大規模な公園、後ろへ下がれば公共施設がどっしりと構えている、大都会の中の一都なのだ。

そんな有効的に生き過ぎている住環境に建つ、築十年になるマンションに住んでから、早八年が経とうとしている。今こうして不審者だと確信出来る人物とインターフォン越しに会話をしているのは、手に持て余すほどの優良マンションを両親が選んでくれたお陰に違いない。

「あー……そう。勧誘だが宗教だか知らねーけど、俺が高橋紅だつてことは本当」

『嘘つき！　嘘つき！　さつきは人違いだって言ったのに！』

「……」

『あ、ごめんなさい。謝りますからインターフォンの電源切らないで！』

全身全霊で『切らないで下さい！ お願いします！』と金切声を上げながら、インターフォンの画面を陣取っている白いのが視界に映る。脳天に響くその声から耳を両手で保護しつつも、俺は白い目で様子を伺い続ける体制を崩さない。と同時に、どうにかしてこの状況を打開する術を必死で考えていた。なんせ、居留守と人違いが通用しない強者なのだ。残る術は必然的に、話を聞くだけ聞いてさつさと帰ってもらう穏便手段をとるか、それとも速やかに警察を呼んで強硬手段をとってしまうかの二択が、俺に残された唯一の選択だった。

天秤が思いつきり強硬手段の方へ傾いているのが現状なのだが、通報した際には全力で逆恨みをしてきそうで怖くてできないのも、また現状だ。やりかねない雰囲気強烈に漂っているからこそ、それに拍車がかかっているわけなのだが。

俺は、自分の思考の中に胡坐を欠いて居座っていた。その間に白いのが何か策を講じようと動いた素振りを見せたようだったが、心ならずだった俺はその様子に気が付くのに一足遅れてしまう。

結果、先手必勝とばかりに飛びかかってきた白いのに、俺は画面越しにも関わらず身構えてしまった。だが、それは徒労で終るはめになる。何故なら、その空洞がいかに也多そうな頭を、これでもかと言うくらいに深々と下げている白いのが、視界に飛び込んできたからだ。

『まずは、こんな朝早くに押しかけてしまった謝罪をします。ごめんなさい』

そう言い終わるがいなや、白いはくると回れ右をしてインターフォンから距離をとると、素早く佇まいを直しはじめた。その際に、至近距離では見えることがなかった華奢な四肢と、その風貌と同色のワンピースが視界に映り込む。そして何よりも、その胸元を飾っている緑色のペンダントが一際目立っていた。

頭を下げた際に乱れてしまった銀の髪を整えたり、皺やら塵やらが付着してしまったワンピースを一心不乱に払ったりと、白いは佇まいを直すのに忙しくしている。前が終われば今度は右後ろ、左後ろと、全くもって自己チェックにぬかりがない。そして最後の仕上げだと言わんばかりに、フリルが施された裾と裾を両手で持ち上げようとしている姿が、徹頭徹尾この目に映り続けている。

あ、こいつやるな、と確信した。

文字通り、白いのは期待を裏切ることもなく、男の前で事を成し遂げてみせた。

それはそれは、五月の空を自由に泳ぐ鯉のようにバツバツと。

悲しいことにも男の性。俺は視線を逸らすこともできずに、その柔らかそうな日焼け知らずの白い太腿に釘点けになっていた。思わず生唾も吞んでしまう。

ぬかりなくチェックしていた白いのが静かになる頃には、目に毒にも薬にもなるそれは、フリルの内側にへと隠れていた。

『お願いです、紅。わたし、もう帰る場所が無いんです。もうここしか無いんですよ』

また違った動揺に苛まれていた意識が戻ってきたのは、無言の懇願を目に浮かべて、一文字一文字を噛み締めるようにゆっくりと、されどしっかりと語る、白いのその言葉を聞いた直後だった。

だが俺は、何を言われたのかすぐに理解できずに聞き返してしま
う。

「……は？」

『どうわーかーらあ！ 魔界から悪戯に度が過ぎると言われて追放されちゃったもんで、点数がゼロにならない限り帰りたくても帰れないんですよ！』

そんな俺の態度に業を煮やした白いのが、肩で息をしながらそう
言い放った。

インターフォンで隔てられた空間に、白けた空気が降臨する。

俺はゆっくりと目を瞑った。そしてしばらく沈吟したあとで目を
開き、重い口を開けてこう言った。

「よし。帰れ」

『うわあい！ 冗談はよし子さん！』

「……」

『あ、嘘。今の嘘』

「……」

『いたたたた。無言の攻撃いたたたた』

やはり猪突猛進してくる白いのを一筋縄にするには、荷が重すぎたようだ。

雑ぜ返す余裕すら与えてくれない。

それはともかくとして、身の危険をひしひしと感じせずにはいられなくなったことは間違いない。と言うのも、己の独善的な道を信じて疑う素振りを見せない白いのが、あつと言う間に防衛線上ぎりぎりまで迫ってきていたからだ。間抜けな声を上げて、飛び退くように壁と合体することに成功したのは、全くもって不可抗力である。

見えるのは、嘘の欠片も見えない雪空の真剣な瞳。

聞こえるのは、激しい飛沫を飛ばす鼻息だったけれど。

だが、心と身体は正直だった。限界だった。一步、いや、百歩も二百歩も後退りさせてしまう破壊力を持っていた白いのを、ただの一般人がどうこう扱えるはずがなかったのだ。

「おま、本当いい加減にしねーと警察呼ぶぞッ」

『うわあい！ 冗談はよ』

その言葉を置き土産として、インターフォンの画面から白いのは消えた。いや、消した。

入れ替わるように電源を切った画面に映り込んだのは、恐怖と動揺で一網打尽にされている赤の双眸だった。電源ボタンの傍らで控

えている人差し指も同じく、不格好にも震えている。

「……」

心臓爆々。ちかちか視界煌々。くらくら頭暈々。

脱力した四肢は、まるで傀儡かいらいのようだった。冷や汗で濡れた背中を壁に押し付けながら、それを支えにフローリングの床上にへと、崩れるように胡坐をかく。

——名前は緑と書いてりよくと読みます。はい、悪魔です。

——不本意ながらも、本日付けで魔界から追放されてしまいました。

——魔王様とオソロとかナウいんですけど。

「……ありえねえ……」

精神的に危ない空笑いが零れ落ちる。

今時この御時世だ。例えば郵便物を漁るだとかして、やろうと思えばいくらかでも何度でも他人の個人情報を手に入れることができるだろう。あの白いのが俺の名前や学歴、あまつさ剩え高橋紅という一人の情報詳細を知っていたかなんて、そんなもの知る由もない。

そこまで思考が辿り着いた時、ふと気が付く。

あれだけ粘着質に押し続けていた呼鈴の音が、ぴたりと止んだのだ。

不気味な静寂がこの場を支配する中、もしや今度はバルコニーから侵入してくるのではないかと、また恐怖が脳裏を棒で突き始めた。居ても立っても居られずに、俺は脱力した四肢に鞭を打って奮い立たせると、躊躇いがちにインターフォンの電源にへと指先を伸ばす。

ごくりと、固唾を呑む音がやけに大きく聞こえる中、落ちていた電源に明かりがパツと点る。瞬間、俺は衝撃に備えて身を構えた。

「……………い、いない？」

だが、それもご破算になる。何故なら画面に映ったのはあの雪空の瞳ではなく、佐藤と彫られたお向かいさんの表札が飾られた扉があるだけだったからだ。

白いのは、どこにも居なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4870ba/>

PERTNER - 更生編 -

2012年1月13日13時52分発行